民間が変える

研究費、ポスト、時間。日本のアカデミアが抱える３つの難問をビジネスを通じて解決しようとする民間企業がある。研究者が自らの好奇心に基づいた挑戦的な研究に取り組み、持続的に研究成果を生み出せる環境をどうしたら守れるのだろうか？　研究者に寄り添い、この解決に取り組む３つの企業、アカデミスト株式会社、株式会社アカリク、カクタス・コミュニケーションズ株式会社の代表に話を聞いた。

アカデミアの３つの難問 どう解決？
寄り添う企業たちの挑戦

研究費　個人が研究者を直接支える世界観へ

academist

柴藤亮介（アカデミスト株式会社 代表取締役ＣＥＯ）
https://www.corp.academist-cf.com/

従来、研究費の獲得方法としては、大きく分けて国・地方自治体、財団、企業という3つの選択肢がありました。特に国による研究費が年々競争的かつ不安定になる中で、クラウドファンディングは第4の方法として注目されています。最大の違いは、個人の財布から直接支援がなされる点です。現在までに当社が運営する学術系クラウドファンディングサイト「academist」では、約2億円の支援金が集まりました。ただし、これは科研費の年間予算2300億円と比較すると0・1%に満たず、今はまだ足元にも及ばない金額です。

しかし、クラウドファンディングの価値は金銭的なものだけではありません。それは、研究者とサポーターの個人的なつながりです。実際に支援をきっかけに共同研究が生まれたり、大手メディアへの掲載につながったりと、これまでに国が実現できなかった新しい人的ネットワークが生まれてきています。この数年でクラウドファンディングに対する大学関係者と研究者の方々の意識も随分変わりました。アカデミア外に目を向け、研究費の獲得手段としてだけでなく有効な研究アウトリーチの手段ととらえる人がますます増えていることを実感しています。

私が作りたい世界観は、約30万人の日本の研究者がそれぞれ何百人、何千人というファンを持ち、継続的に支援を受けて研究を進めるという新しい方法を確立することです。これからの研究には次世代型のチームづくりが必要不可欠です。私たちは、クラウドファンディングという仕組みを通して、教授・准教授・助教という旧来のトップダウン型のラボの枠組みに閉じず、内外に多様な仲間を作って戦略的に役割分担し情報発信することで人と資金が継続的に集まる「開かれた学術業界」を実現していきたいと考えています。自ら動いて状況を変えていくパワーのある研究者の方と共に、大きなムーブメントを作っていきます。

ポスト　博士人材が安心して挑戦できる受け皿作り

Acaric アカリク

山田諒（株式会社アカリク 代表取締役）
https://acaric.co.jp/

アカリクのミッションは、アカデミアが持つ知恵の流通の最適化です。日本では、能力が高い博士の民間就職率が極めて低い状態です。創業者の林信長は、自身の大学院在籍経験から、この問題を解決しようと会社を始めました。

博士人材の民間就職には、企業と大学院生双方に根深い意識のねじれがあります。大学側には博士はアカデミアに残るべきであるという意識がいまだ強くあります。また、実際に博士を積極的に採用したい企業がいても、博士側は自分の研究内容に固執してしまう一方で、民間企業側は修了時点で30代手前である博士に対して、「社会経験が乏しい」と採用を渋ってしまいます。このように、なかなか最適化につながらないのが現状です。

そこでわれわれのような民間企業の出番です。アカリクには、自らが博士課程やポスドクを経験し、博士と企業両方の立場を理解した経験豊富な社員が多く在籍しています。民間企業だからこそ分野や業種の固定観念に縛られずにマッチングできます。大学院生の研究の内容を深く理解し、その人の核となる能力を見いだしたうえで、本人が思いつかないような能力を生かせる領域の仕事を提案し、選択肢を広げることができるのです。

アカデミアで身に付けたどのような能力が企業で直接役立つのか？とよく訊かれますが、これは「高度な問題解決能力」に尽きます。研究は自ら課題設定してＰＤＣＡを回しながら成果につなげていくプロセスです。民間企業の研究開発、エンジニアリング、解析、コンサルティングといった領域で、博士人材のポテンシャル採用に高い評価をいただいています。

私たちの仕事は、アカデミアで研究に挑戦したいと思う人たちが、将来の不安を抱えずに修士課程・博士課程に進み、心置きなく研究に注力し挑戦できる環境を作り、その受け皿となることです。民間企業を経験したからこそ社会人学生になりたいというケースもあるでしょうし、民間企業にもアカデミアにも、いつでも戻れるんだという可能性を感じてもらいたい。アカリクを卒業して活躍されている人たちと協力して、博士の新しい生き方を発信していきたいと思っています。

時間　テクノロジーで研究者に時間と自由を取り戻す

CACTUS

湯浅誠（カクタス・コミュニケーションズ株式会社 代表取締役）
https://cactusglobal.com/jp/

研究者に研究する自由と時間を取り戻すこと、国や言語によってハンデをうけないこと、その当たり前の世界を作ることが、カクタスが創業以来エディテージというブランドを通じて一貫して取り組んできた課題です。熾烈化する論文出版競争に、増える雑務に、ポストと予算の確保にと、研究者の時間と自由はますます奪われるばかりです。人類の発展において極めて貴重なはずの研究者の頭脳と時間がいびつなシステムによって奪われている状況を変えなければ、という使命を感じています。

問題解決にはテクノロジーが大きな鍵を握っています。人的サービスだけでいち企業がこの課題に立ち向かうのには限界があります。研究者の日々の情報収集、論文出版、情報流通にいたるまで、アカデミアの活動を最適化する余地は山ほどあるのです。カクタスは自社に開発チームを抱え、機械学習や自然言語処理（ＮＬＰ）などデータサイエンスを活用した、研究支援のためのＡＩツールやプラットフォーム、アプリの開発に力を入れています。

今や研究者の多くが自動翻訳や英文校正ツールを駆使して短時間で論文を完成させる技を身につけています。学術出版社側もＡＩを活用して論文のスクリーニングの精度を上げ、出版にかかる時間短縮にしのぎを削っています。研究は高度に専門分化されているからこそ、その情報処理にはテクノロジーが役に立ちます。私たちは個人の研究者への手厚いサービスを長年行ってきた知恵を生かして、人を介すべきところと自動化すべきところ、2つの勘所を見極めたソリューションを提供していけると考えています。

最近では個人の研究者向けに、複数の研究支援ＡＩツールを統合したResearcher.Life（リサーチャーライフ）というプラットフォームをリリースしました。投稿前の論文エラーチェックやおすすめ文献アプリ、隙間時間で学習できるコースやピアフォーラムなどを搭載しています。将来的には研究活動に関わるすべてがそこで完結する国際的な「研究者エコシステム」として成長させていきたいと思っています。研究者が本質的な仕事に注力できるよう、企業としてできることを模索していきたいです。

アカデミアを支えるプロが存在する意味

大学と仕事をすることの難しさ

湯浅　われわれが民間企業として一番悩まされるのは「公平性」を必要以上に重視する大学のスタンスではないでしょうか？　一生懸命知恵を絞った提案に「一社だと公平性が保たれないので数社で進めます」と最後にどんでん返しがあることは日常茶飯事です。

山田　人材業界はさらに競争が激しく、大学への営業も熾烈です。人材紹介エージェントというだけで相手にしてもらえないというつらい経験はよくありますね。

柴藤　クラウドファンディングも同じで、「academistだけ使うのは公平性がない」とやはり言われます。研究者の方が使いたいと言ってくださっても、学長決済までに２年かかり機を逃してしまったケースもあります。大学側の意思決定フローのアップデートも必要なのかもしれません。

なぜ研究者という存在を支えるのか

山田　研究者への純粋なリスペクトがあると同時に、国がお金をかけて育て上げた高度人材を活かさなければという使命感があります。突き詰めた先に職業研究者としての道があれば、その可能性を社会はもっと厚くしていくべきです。そして、別のキャリアを模索するタイミングが来たとき、私たちはセーフティーネットとしてそこにいたいのです。

柴藤　いまアカデミアという業界自体が大きな変革の中にあります。情報革命によって出版や大学のあり方が劇的に変わる過渡期の中では、研究者が個人の発信力を高めることによって世界を変えうる研究が生まれるのではないか。民間企業が持つ資本主義的な考え方と、アカデミアの価値観を融合させ、全く新しいものを生み出す場を作りたいのです。

湯浅　研究者が持つ、考えて議論をし尽くし、自らに寄って立ち人と違う意見を言える能力を社会の力にしていくべきです。彼らの自由を守る協力者としてわれわれのような企業がいる意味があると思っています。アカデミアを支えることは、ひいては科学技術と文化の恩恵を30年後、50年後も守りつづけることにつながります。